

関西大学創立130周年記念事業・関西大学博物館開設20周年記念 夏季企画展

角倉素庵と俵屋宗達  
——江戸初期の能書家と絵師、知られざる二人の偉業——

平成26年6月15日[日] — 7月19日[土]/日曜日休館、ただし6月15日[日]は開館

関西大学博物館



【俵屋宗達筆 紙本金地著色「楊梅図屏風」六曲一隻】

楊梅(やまもも)はヤマモモ科の常緑の高木で雌雄異株(雌の樹に実がなる)、葉は長楕円形で、春(四、五月)には松の花に似た帯黄紅色の小さな花をつけ、夏(六、七月)には1、2粒ほどの苺(いちご)のような紫紅色の実が熟す。その実は芳香があって美味である。近世の地誌によれば、楊梅の実は、山城国山科の醍醐寺が特産で、宮中ほかに進上された。

平成十年(1998)、叢林と溪川の水の流れを描いた「花木図屏風」六曲一隻(図版)が再出現して注目された(初公開は1939年、東京上野・日本美術協会「東洋古美術展」)。本屏風には落款・印章はないが、その構図法や描法は、江戸初期の絵師・俵屋宗達の画風の特徴を示している。屏風右第二扇の上部、実物大の楊梅の実が可憐な趣で霞の間に覗かせている。

摂政・一条兼退(いちじょう・かねとう、後水尾上皇の弟、1605～1672)が寛永七年(1630)十二月二日に、後水尾院に上奏した書状(後水尾院勘返状)に、宗達が金箔地「楊梅之屏風」ほか三屏風を描いたことが記されている。本「楊梅図屏風」(図版)は後水尾院が命じたその屏風に相当するものと考えられる。

### 【展観の趣旨】

本展観では、近年発見された角倉素庵と俵屋宗達の親交を物語る新史料「角倉素庵書状（宗舟・平次宛）」、宗達が寛永七年（1630）に後水尾上皇の依頼を受けて描き、進上した紙本金地著色「楊梅図屏風」六曲一隻を中心に、素庵の豊麗な書跡（和歌、漢詩、謡本、物語など）、美しい装訂の嵯峨本『伊勢物語』『源氏物語』『謡本』など、宗達最晩年の代表作「伊勢物語図色紙」第五十二段「かざり粽」（益田家本・三十六図のうち）、104点を展示する。宗達の《料紙装飾》と素庵の華麗な《書》のコラボレーションが見所である。今回の展観では初公開の作品が多い。素庵と宗達の知られざる偉業を是非知っていただきたい。本展観は、素庵と宗達の従来の定説を検証し、二人の真実に迫ろうとするものである。

### 【角倉素庵と俵屋宗達】

角倉素庵（1571～1632、本姓は吉田氏、通称与一、号西山・期遠）は江戸時代初期、父了以（1554～1614）とともに安南国朱印貿易、保津川疎通、高瀬川運河開鑿事業などを行った京都の豪商である。一方、朱子学者・藤原惺窩（1561～1619）門の儒学者でもある。

素庵は、慶長期（1596～1614）の初めに、洛西嵯峨の自邸内に古活字版印刷工房を設け、古活字版で漢籍などを印行した。慶長四年（1599）頃から八年（1603）に、古活字版『史記』（百三十巻）全五十冊を初めて刊行した。それと並行して慶長十年代、平仮名連綿書体の木製活字（連彫活字）を用い、絵師・俵屋宗達（料紙装飾）や絵師〔絵草紙屋〕・狩野一雲（挿絵）、経師・紙師宗二（装訂）らの協力を得て、美しい装訂の嵯峨本『徒然草』二冊（慶長八年頃刊）、『伊勢物語』二冊（慶長十三年刊）、『源氏物語』全五十四冊、『観世流謡本』（以上古活字版）、『古今和歌集』二冊（整版）、『尊円本三十六人歌合』一卷（整版）など、国書十数書目を出版した。素庵は、自ら美しく読みやすい平仮名書体（フォント）をデザインし、また整版本では自ら版下を書き、装訂の監修を行い、自ら校訂した良質のテキストを刊行することに成功した。嵯峨本『伊勢物語』（慶長十三年・1608）には、我が国の文学書としてはじめて四十九図の挿絵（整版画。西欧の銅版画の表現技法を取り入れる）があり、その中院通勝の奥書によれば、女性や子供にも享受できるようにしたという。素庵は嵯峨本に斬新な趣向を行った。知友の公卿・中院通勝（也足軒）や観世大夫身愛（黒雪）らが嵯峨本制作に参加し、協力した。素庵は、理想とする私家版出版の夢を果たした。

嵯峨本は、世界印刷文化史上、もっとも美しい本の一つである。それは、十九世紀、イギリスのウィリアム・モリス（1834～96）のケルムスコット私家版と共通する。なお、通説として、江戸初期の数寄者・本阿弥光悦（1558～1637）が嵯峨本の文字（活字と整版）の版下を書いたとか、出版を企画したとかいう説があるが、確証はない。近代の伝説にすぎない。なお、「光悦謡本」や「光悦蒔絵」は、現代の概念であって、江戸時代にはない。

素庵は在世当時、能書家として知られた。中国書法を嗜み、また仮名書体に一家を立てた。素庵は晩年、宿痾の病（ハンセン病）<sup>[注1]</sup>を患い、歴史から後退せざるを得なかった。素庵のこの不幸な

出来事に乗じて、後世、光悦の支持者らによって、光悦没後、江戸前期の正保二年（1645）頃から、素庵の書（無落款）に光悦の偽印が捺され、あるいは偽款が入れられ、「光悦の書」に捏造された。近年、光悦の書法（書状や聖教類）と素庵の書法の研究が進んできた。二人の顕著な違いは、起筆において、光悦は「蔵鋒」、素庵は「露鋒」の特徴的な筆法を用いている点である。[注2] 光悦と素庵の書体は異なる。素庵が光悦の書の弟子であるという説は江戸中期の元禄期頃に現れるが、同時代の文献史料には認められない。

江戸時代初期の絵師・俵屋宗達（生没年未詳、本姓は野野村氏、字伊年、諱宗達、号対青）は、従来、定説として京の富裕な上層町衆出身の絵師と言われてきたが、近年、京都東山の松原通り（清水道、旧五条通り）の南、「六原」（葬地の鳥辺野の辺）に居住し、書や冊子に使う装飾料紙、扇絵を製作販売する絵屋、屋号「俵屋」を経営した下層町衆の町絵師（元狩野派の絵師か）であるという説が提示された。宗達は、金銀泥や岩絵具、木版雲母刷で、身近な景物を描き、生命の輝き、儂さ、時の移ろい、つまり無常観を表した。

素庵と宗達は、慶長初期（1596～）から親交をもち、多くのコラボレーション（宗達下絵・素庵書）を行い、書と絵が融合した典雅な和歌巻や詩巻、謡本を作った。宗達（野野村知求）は晩年、寛永六年（1629）冬に、癩[注3]で社会から退いた素庵に代わって、平安王朝の漢文撰集である素庵校訂『本朝文粹』十四巻を古活字版で出版した。寛永七年（1630）春、その功績により、褒賞として朝廷から法橋が叙位された、と推測される。職人絵師である宗達は宮廷御用絵師になった。宗達は叙位の返礼として、慣例に従い、「楊梅図屏風」ほか屏風三双を描き、後水尾上皇の仙洞御所、東福門院の女院御所、明正天皇の禁裏御所の三御所に進上した。これを期に、本格的な屏風絵や襖絵の大作を描いた。宗達の大画面作品には、かつて制作した装飾料紙のモチーフや構図法が活かされた。寛永九年（1632）から十年頃、「伊勢物語図色紙」「風神雷神図屏風」「養源院襖絵・杉戸絵」を描き、後、娘婿の宗雪（本姓は喜多川氏か、俵屋宗雪、法橋宗雪と称する）に絵屋「俵屋」を譲り、絵筆を置き、隠居したと思われる。宗達の没年は明らかでないが、宗達存命中は、俵屋ブランドとして「宗達法橋」「法橋宗達」の落款、「対青軒」「対青」の朱文円印が使用された。

素庵と宗達は、寛永十年代（1633）にそろって歴史の闇に消え、世間から忘れ去られた。画史・画家伝の書『本朝画史』（狩野山雪初稿・狩野永納増補、元禄四年・1691年刊）には、「宗達」の記述は全くない。宗達は狩野山楽・山雪父子と同じ時期、京都で活躍し法橋位を得た絵師であるのに、不思議なことである。それから、三百年を経て、二人は大正期（1912～1925）に再び世に現れた。素庵と宗達の謎は、いまだ明らかにされていない。

（企画コーディネーター：関西大学文学部非常勤講師・文学博士 林 進）  
（立命館大学非常勤講師・文学博士 本多 潤子）

## 出陳品目録

名称	員数	摘要	作者(筆者)	材質	法量 (cm)		所蔵(空欄は個人蔵)
					縦	横	
1 角倉素庵書状	一幅	中院通勝宛(推定)	角倉素庵	紙本墨書	32.2	49.1	
2 角倉素庵書状	一幅	藤本宗舟・角倉平次宛	角倉素庵	紙本墨書	31.0	38.4	
3 角倉素庵書状	一幅	中西郎二宛	角倉素庵	紙本墨書	31.0	30.0	大阪青山歴史文学博物館
4 藤原惺窩書状	一幅	角倉素庵(期遠亭)宛	藤原惺窩	紙本墨書	15.8	67.9	
5 本阿弥光悦書状	一幅	「はたう」宛	本阿弥光悦	紙本墨書	34.3	51.2	
6 近衛信尋書状	一幅	里村玄仲宛	近衛信尋	紙本墨書	35.4	51.3	
7 和歌懐紙	一幅	「なつなれば」『古今和歌集』	角倉素庵	紙本墨書	23.2	31.9	
8 六条有純和歌懐紙	一幅	秋日同詠二首和歌	六条有純	紙本墨書	38.7	51.7	
9 慶長十八年歳旦懐紙	一幅	近衛信尹ほか和歌・発句	角倉素庵	紙本墨書	35.8	51.0	
10 詩歌巻	一卷	『瀛奎律髓』、『定家八代抄』	角倉素庵	紙本墨書	25.5	753.4	
11 和歌巻	一卷	定家『拾遺愚草』	角倉素庵	紙本墨書	25.1	280.2	
12 和歌巻	一卷	『水無瀬恋十五首歌合』	秋葉工庵	紙本墨書	27.1	332.9	
13 和歌色紙	一枚	「あひみでの」『百人一首』	筆者不詳	紙本墨書	13.2	11.3	
14 漢詩色紙	一枚	蘇軾「月夜與客飲杏花下」	角倉素庵	紙本墨書	18.2	16.5	
15 漢詩色紙	一枚	「楊貴妃歸唐帝思」『和漢朗詠集』	角倉素庵	紙本墨書	20.3	17.1	
16 和歌色紙	一枚	「明ぬるか」『新勅撰和歌集』	角倉素庵	紙本墨書	18.8	16.6	
17 和歌色紙	一幅	「月やあらぬ」。宗達金銀泥著色下絵	角倉素庵	紙本墨書	18.3	15.9	
18 和歌色紙	一幅	「行やらで」。宗達金銀泥下絵	角倉素庵	紙本墨書	18.3	15.9	
19 和歌色紙	一幅	「荒玉の」。宗達金銀泥下絵	角倉素庵	紙本墨書	18.3	16.0	
20 和歌色紙	一幅	「宿ちかく」。木版金銀泥刷下絵忍草図	角倉素庵	紙本墨書	19.8	17.6	
21 和歌色紙	一幅	「わずれじな」。金泥下絵水辺景図	高松宮好仁親王	紙本墨書	13.2	11.8	
22 和歌色紙	一幅	「かざりありて」。銀泥下絵水辺景図	高松宮好仁親王	紙本墨書	17.5	14.3	
23 和歌色紙	一枚	「恋わたる」。金銀泥下絵松図	高松宮好仁親王	紙本墨書	21.1	18.7	
24 和歌短冊	一幅	「うらめしき」。宗達金銀泥下絵稲田図	角倉素庵	紙本墨書	36.2	6.4	
25 和歌短冊	一枚	「世にふるは」。金銀泥下絵水辺景図	角倉素庵	紙本墨書	36.0	5.8	
26 藤原惺窩和歌短冊「歳暮」	一枚	「いつまでか」。打ち墨り料紙	藤原惺窩	紙本墨書	34.8	5.4	
27 高松宮好仁親王和歌短冊「霧中山」	一枚	「たれこえて」。打ち墨り料紙	高松宮好仁親王	紙本墨書	37.0	5.5	
28 和歌短冊	一枚	「むかしへや」。金銀泥下絵水辺景図	松橋堯円	紙本墨書	36.0	5.8	
29 和歌短冊	一枚	「立田河」。金泥下絵松図	阿野実顕	紙本墨書	35.3	5.4	
30 水無瀬氏成和歌短冊「神祇」	一枚	「瑞籬の」。慶長十一年。打ち墨り料紙	水無瀬氏成	紙本墨書	37.4	5.5	
31 和歌短冊	一枚	「しら露は」。打ち墨り料紙	高辻長純	紙本墨書	37.4	5.3	
32 和歌短冊	一枚	「一ふしに」。打ち墨り・金砂子料紙	持明院基定	紙本墨書	36.5	5.7	
33 和歌短冊	一枚	「人はこず」。緑具引き地金砂子料紙	持明院基定	紙本墨書	36.5	5.7	
34 葉室類業和歌短冊「蝉声」	一枚	「山風の」。打ち墨り料紙	葉室類業	紙本墨書	36.7	5.6	
35 岩倉具起和歌短冊「寄秋露恋」	一枚	「ことの葉の」。打ち墨り料紙	岩倉具起	紙本墨書	36.4	5.7	
36 里村昌程発句短冊	一枚	「出るより」。淡彩下絵秋草図	里村昌程	紙本墨書	35.6	5.9	
37 里村昌通発句短冊	一枚	「とふ人の」。金銀泥下絵秋草図	里村昌通	紙本墨書	36.3	5.4	
38 里村祖白発句短冊	一枚	「夏は世の」。金泥下絵水辺景図	里村祖白	紙本墨書	36.4	5.3	
39 里村玄陳発句短冊	一枚	「法の水」。金箔散し砂子料紙	里村玄陳	紙本墨書	36.8	5.6	
40 里村玄陳発句短冊	一枚	「木々に見む」。打ち墨り料紙	里村玄陳	紙本墨書	36.4	5.7	
41 里村玄俊発句短冊	一枚	「霜夜には」。金銀泥下絵松藤図	里村玄俊	紙本墨書	36.2	6.0	
42 里村玄俊発句短冊	一枚	「一年の」。金銀泥下絵秋草図	里村玄俊	紙本墨書	36.4	5.7	
43 白描源氏物語絵巻詞書断簡	一幅	「藤のうら葉」帖。金銀泥下絵	角倉素庵	紙本墨書	29.8	52.8	大阪樟蔭女子大学図書館
44 謡本『三井寺』断簡	一枚	「として」。金銀泥下絵蘭図	角倉素庵	紙本墨書	21.5	14.3	
45 謡本『井筒』断簡	二枚	色替り具引き雲母刷料紙	角倉素庵	紙本墨書	(各) 23.0	15.4	
46 楊梅図屏風	六曲一隻	無落款	俵屋宗達	紙本金地著色	150.7	344.4	
47 耕作図屏風	二曲一隻	無落款	俵屋宗達	紙本著色	157.2	175.0	
48 伊勢物語図色紙	一面	第五十二段「かざり粽」。益田家本	俵屋宗達	紙本金地著色	24.0	21.0	
49 伊勢物語図扇面	一幅	第十四段「くだかけ」	伝俵屋宗達	紙本金地著色	19.5	56.0	
50 騎馬武者図扇面	一幅		伝俵屋宗達	紙本著色	18.0	55.5	

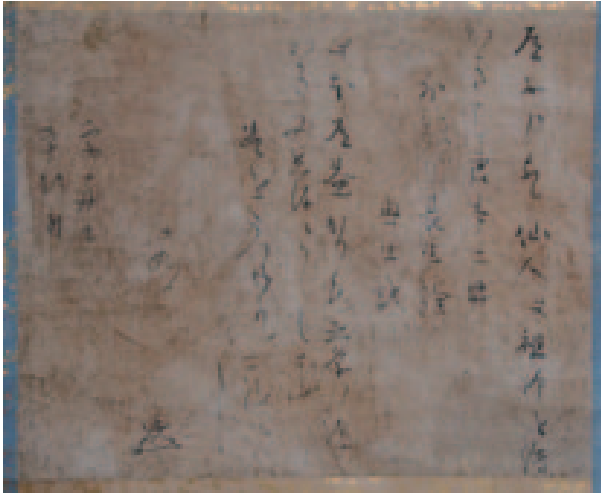
51	騎牛人物図	一幅	「宗達法橋」。「対青軒」朱文円印	伝依屋宗達	紙本墨画	90.9×39.3	
52	寒山図	一幅	「宗達法橋」。「対青軒」朱文円印	伝依屋宗達	紙本墨画	101.0×45.9	
53	白鷺図	一幅	「宗達法橋」。「対青軒」朱文円印	伝依屋宗達	紙本墨画	108.9×45.0	
54	鴨図	一幅	「宗達法橋」。「対青」朱文円印	伝依屋宗達	紙本墨画	90.8×39.3	
55	源氏物語図色紙帖	一帖	八図(第十帖賢木から第十七帖絵合)	筆者不詳	紙本著色	(各)20.4×17.0	大阪樟蔭女子大学図書館
56	富士山に雪図	一幅	里村昌俔・玄陳・祖白発句賛		紙本金泥	21.2×33.4	
57	与謝蕪村書簡	一幅	山脇玄冲・三井高典宛	与謝蕪村	紙本墨書	15.7×52.9	
58	山脇玄冲和歌短冊「被揚霞」	一枚	「艸とるも」。道作は玄冲	山脇玄冲	紙本墨書	36.1×5.1	
59	小川芋銭書簡	一幅	杉田雨人宛。明治三年四月二十六日付	小川芋銭	紙本墨書	18.4×78.2	
60	荒川豊蔵書簡	一幅	白畑よし宛。昭和四十四年七月三十日付	荒川豊蔵	紙本墨書	18.7×50.9	
61	大岡信書簡	一幅	林進宛。一九九九年師走大晦日付	大岡信	紙本墨書	28.2×51.0	
62	雅文	一幅		高芙蓉	紙本墨書	32.0×22.8	
63	蘭客	一幅	蘭客は、よい友という意味	早川幾忠(完石)	紙本墨書	35.3×66.0	
64	山水図	一幅		明譽古礪	紙本墨画	30.0×52.4	
65	葦に行々子図	一幅		采女正	紙本墨画	103.8×48.1	
66	葦に鶴図	一幅	もと香包	木下応受	紙本金地著色	29.5×22.2	
67	霊鷲山釈迦図	一幅		狩野永岳	紙本墨画	113.8×39.8	
68	訪友図	一幅	清時代後期。『唐詩七言画譜』を粉本にする	筆者不詳	絹本著色	30.6×28.6	
69	あじさい図	一幅	万葉集卷第十一「吾背子に」	早川幾忠	紙本著色	20.8×13.5	
70	蓮池水禽図	一幅	朝鮮時代後期	筆者不詳	紙本著色	49.6×31.4	
71	写本・謡本『吉野静』	一帖	百番本。(題簽)宗達下絵・素庵書	角倉素庵	紙本墨書	23.9×18.3	大阪青山歴史文学博物館
72	写本・謡本『祇王』	一帖	百番本。(題簽)宗達下絵・素庵書		紙本墨書	23.8×18.3	
73	写本・謡本『とくさ』	一帖	百番本。(題簽)宗達下絵・素庵書		紙本墨書	23.8×18.3	
74	写本・謡本『放生川』	一帖	百番本。(題簽)宗達下絵・素庵書		紙本墨書	23.8×18.3	
75	写本・謡本『藤太』	一帖	百番本。(題簽)宗達下絵・素庵書		紙本墨書	23.8×18.3	
76	嵯峨本『史記』	全五十冊	古活字版。角倉素庵刊行。慶長八年刊			30.5×21.5	関西大学図書館
77	『本朝文粹』	全十五冊	古活字版。素庵校訂。寛永六年刊行			29.4×21.5	関西大学図書館
78	嵯峨本『平家物語』	全十二冊	古活字版。「下村時房刊之」			28.3×21.5	大阪青山歴史文学博物館
79	嵯峨本『平家物語』	二冊	古活字版。下村時房本。第六巻、第八巻			28.1×21.2	
80	嵯峨本・謡本『浮舟』	一帖	古活字版。特製本。観世黒雪節付			24.0×18.0	関西大学図書館
81	嵯峨本・謡本『鶉飼』	一帖	古活字版。特製本。観世黒雪節付			24.0×18.2	大阪樟蔭女子大学図書館
82	嵯峨本・謡本『老松』	一帖	古活字版。特製本。観世黒雪節付			24.0×18.0	
83	嵯峨本・謡本『放生川』	一帖	古活字版。上製本。観世黒雪節付			24.1×18.1	
84	嵯峨本・謡本『老松』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
85	嵯峨本・謡本『むめがえ』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
86	嵯峨本・謡本『摂待』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
87	嵯峨本・謡本『杜若』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
88	嵯峨本・謡本『矢卓鴨』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
89	嵯峨本・謡本『紅葉狩』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
90	嵯峨本・謡本『道明寺』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
91	嵯峨本・謡本『軒端梅』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
92	嵯峨本・謡本『龍田』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
93	嵯峨本・謡本『夕がほ』	一帖	古活字版。色替り本。観世黒雪節付			23.8×18.0	
94	嵯峨本『伊勢物語』	全二冊	古活字版。慶長十三年再刊本(第二種本)			27.1×19.4	大阪青山歴史文学博物館
95	嵯峨本『伊勢物語』	全二冊	古活字版。慶長十三年再刊本(第二種本)			27.0×19.2	
96	嵯峨本『源氏物語』	五冊	古活字版。(題簽)素庵版下。全五十四冊			27.8×18.6	大阪樟蔭女子大学図書館
97	嵯峨本『古今和歌集』	全二冊	整版。(題簽・本文)素庵版下			27.5×18.5	大阪樟蔭女子大学図書館
98	覆刻『嵯峨本三十六人歌合』	一帖	整版。折帖(法帖)			31.5×11.8	
99	『絵入源氏物語』	全二十四冊	整版。源氏物語ほか全六十巻			26.9×18.9	大阪樟蔭女子大学図書館
100	『本朝名公墨宝』	全四冊	整版。慶安元年跋刊。(別冊)「素庵」			28.0×18.9	
101	『光悦流消息』	一冊	整版。三家之筆法のうち。元禄十一年刊			27.2×19.2	
102	安永六年春興帖『夜半染』	一冊	整版。版下は蕪村筆			22.5×15.8	関西大学図書館
103	『仙仙奇踪(無生訣)』	二冊	整版。明・万曆三十年刊			26.9×17.0	
104	『尾形光琳印譜』	一帖	組田昌平氏旧蔵。昭和時代押印			18.2×12.2	

## 素庵・宗達関係年譜

西暦	和暦	素庵・宗達事項	関連事項
1558	永禄元		本阿弥光悦、生まれる。
1571	元亀二	六月五日、角倉素庵 (名与一、諱玄之、後貞順と改め、字子元、素庵と号した。別号は期遠、西山)生まれる。	
1588	天正十六	素庵、相国寺で儒学者藤原惺窩に謁し、師事する。	
1590	天正十八		狩野永徳(48)没。
1594	文禄三	素庵の長男庄七(玄紀)、生まれる。	淀君、養源院を建立する。
1596	慶長元	このころ、素庵、居住地の嵯峨において古活字版で漢籍を出版する。	政仁親王(後の後水尾天皇)、生まれる。
1597	慶長二	※古活字版・慶長勅版『錦繡段』『勸学文』成る。	
1598	慶長三	※キリシタン版『落葉集』成る。	八月、豊臣秀吉没。
1599	慶長四	※慶長勅版『日本書記神代記』、古活字版『延寿撮要』(医学書、跋刊)成る。	
1600	慶長五	※キリシタン版『和漢朗詠集』成る。	九月、関ヶ原合戦。
1602	慶長七	福島正則、「平家納経」を修復する。 宗達、化城喩品・喩累品・願文三巻の表紙・見返絵を補作する。	
1603	慶長八	素庵、この年以前に、古活字版『史記』、嵯峨本『徒然草』を出版する。 角倉了以・素庵、朱印貿易(安南国貿易)を開始する。	徳川家康、征夷大将軍に任じられる。
1605	慶長十	素庵、謡本『大原御幸』(料紙装飾は宗達)を書写する。 素庵、『隆達節小歌巻』(料紙装飾は宗達)を染筆する。	
1606	慶長十一	了以・素庵、大堰川(保津川)を疎通させる。 素庵、後藤本『親世流謡本五十番』(料紙装飾は宗達)を書写する。 光悦(素庵)書・宗達画「新古今集和歌色紙」(慶長十一年十一月十一日)	豊臣秀頼、古活字版『帝鑑図説』(挿絵117図)を刊行する。
1607	慶長十二	了以・素庵、富士川を疎通させる。 毛利秀就、「藤・浜松図扇面」(金銀泥絵は宗達)に和歌を染筆する。	
1608	慶長十三	素庵、嵯峨本『伊勢物語』(初刊・再刊(第二版)・第三版、挿絵49図)を出版する。	
1610	慶長十五	素庵、嵯峨本『源氏小鏡』を出版する。	中院通勝没。長谷川等伯没。吉田宗恂(素庵の叔父)没。
1611	慶長十六	素庵、幕府に京都・高瀬川運河の建設を請願する。	後水尾天皇即位。
1614	慶長十九	了以・素庵、京都・高瀬川運河を完成させる。 角倉了以没(七月十二日)。	近衛信尹没。千少庵没。 大坂冬の陣。家康、慶長書写を開始する。
1615	慶長二十 (元和元)	素庵、淀川過書船支配、木曾山巨材採運使、近江坂田郡代官を命じられる。 素庵、平安時代漢文集『本朝文粹』十四冊を書写する(後陽成天皇依頼か)。	大坂夏の陣。 光悦、鷹が峰を拝領する。
1616	元和二	『中院通村日記』三月十三日の条に「俵屋絵」の記事がある。	徳川家康没。
1617	元和三	素庵、江戸城改築により、富士山材木の採運にあたる。	後陽成院没。
1618	元和四	素庵、嵯峨に戻り、学究生活に入る。	
1619	元和五	素庵、長男玄紀に二条角倉屋敷(京角倉)を与え、家督の半分を譲る。	藤原惺窩没。養源院焼失。
1620	元和六		徳川和子(東福門院)入内する。
1621	元和七	《通説では、宗達、養源院の襷絵・杉戸絵を描く》	徳川秀忠夫人(崇源院)、養源院を再建する。
1622	元和八	仮名草子・古活字版『竹斎』に「あふぎは都たわらや」の文言がある。	
1624	寛永元	素庵、『本朝文粹』十四巻七冊(国立国会図書館本)を書写する。	
1626	寛永三		九月十五日、崇源院(秀忠夫人)没。
1627	寛永四	素庵、宿痾(癩)により家を出て、嵯峨の千光寺の跡地に小庵を構え、隠棲する。	
1629	寛永六	冬、野野村知求(宗達)、素庵校訂・古活字版『本朝文粹』十四巻を出版する。	後水尾天皇叙位。明正天皇受禪する。
1630	寛永七	角倉平次、新刊『本朝文粹』十四巻十五冊を徳川義直に進上。宮中・貴顕に献上するか。 素庵、了以十七回忌のため、「角倉了以行状石造碑」を千光寺大悲閣に建碑する。 宗達、新刊『本朝文粹』出版の功績により、法橋が叙位されるか。	七月三日、中和門院没。
		宗達法橋、九月上旬までに、禁裏御本「西行法師行状之絵巻」を模写する。	九月十二日、明正天皇即位する。後水尾院。
		十二月二日、宗達法橋、後水尾院に「楊梅図屏風」の制作経過を報告する。 (「楊梅図屏風」ほか屏風三双は、法橋叙位の返礼のための作品か)	十月十日、近衛信尋、中和門院を追善する。 十二月十日、後水尾院、仙洞御所に移る。
1631	寛永八	宗達法橋、後水尾院に金地著色「楊梅図屏風」(個人蔵)ほか三双を献上。 宗達法橋、醍醐寺三寶院依頼の「源氏物語図屏風」(関屋・澤標)を描く。	
1632	寛永九	六月二十二日、素庵(62)没。嵯峨西山の平山(化野)に葬られる。 九月、宗達法橋、東福門院より養源院「松岩図襖」の制作を依頼されるか。	正月廿四日、徳川秀忠没。 浅井長政(養源院)に従二位権中納言を追贈。

1633	寛永十	四月、堀正意撰文「素庵行状木造碑」が千光寺大悲閣に建碑される。 宗達、素庵追善のために益田家本「伊勢物語図色紙」(36図)を描くか。 宗達、素庵鎮魂のために「風神雷神図屏風」(建仁寺)を描くか。 宗達、浅井長政鎮魂のために養源院「松岩図襖」「白象図杉戸」ほかを描くか。 宗達、「神農図」(王鞆南賛)を描くか。	素庵の孫玄通、京角倉家を継ぐ。 光伝筆「浅井長政像」(養源院蔵)。
1634	寛永十一	宗達、この年までに引退したか。 没年まで俵屋ブランド「宗達法橋」「法橋宗達」(落款)、「対青軒」「対青」(印章)が使用される。 角倉平次、東山・清水寺に「角倉船絵馬」を奉納する。	
1636	寛永十三		安南国貿易廃絶。
1637	寛永十四		本阿弥光悦(80)没。本阿弥光瑳没。
1638	寛永十五		烏丸光広(60)没。高松宮好仁親王没。
1639	寛永十六	※俵屋宗雪、堺・養寿寺の杉戸絵を描く。この頃までに、宗達没か。 ※角倉玄紀、素庵編「文章達徳録綱領」(堀正意序)を刊行する。	松花堂昭乗(58)没。鎮国令。
1642	寛永十九	※俵屋宗雪、法橋の位にある(『隔冥記』)。宗雪、金沢で「俵屋」を営む。	
1648	慶安元年	※『本朝名公墨宝』四冊(別巻として「素庵」巻を附す)。	
1682	天和二年	※「繪所 俵屋野々村氏」(黒川道祐『雍州府志』)。	
1685	貞享二年	※「俵屋家の女国春筆絵扇二本進上」(『北小路俊光日記』)。	
1690	元禄三年	※「絵師 俵屋流野々村」(『人倫訓蒙図彙』)。	
1694	元禄七年	※『万宝全書』「本朝古今名公古筆諸流」に「光悦流本阿弥、角倉与市」とある。	

【京都東山の「六原」(ろくはら、六波羅)に居住した絵師、俵屋・野野村宗達】



角倉素庵書状(宗舟・平次宛)

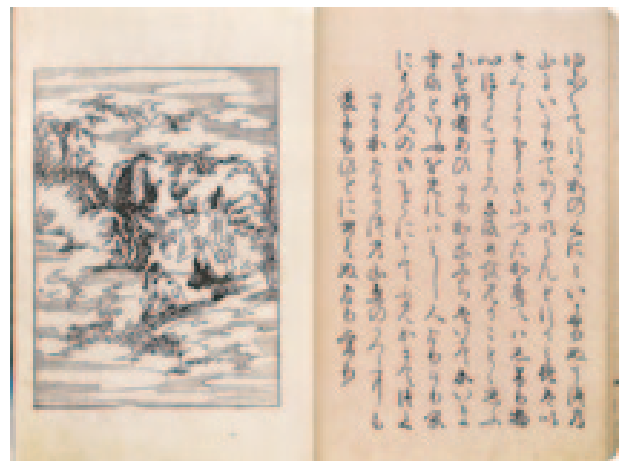
道不より参候、仙人又祖師を絵  
かき申候、唐本二冊  
外題は 長生詮  
無生訣  
此本道益かり候て、六原の絵  
かき、又、先後にかし申候本也。  
是をたつね候て可給候。  
かしく  
十九日 子(花押)  
宗舟公  
平次殿

本書状は角倉与一(素庵)の花押と書体の特徴から、ハンセン病により隠棲する寛永四年(1627)以前、寛永元年以降のものと考えられる。唐本『長生詮』『無生訣』とは、明末の儒学者、洪応明が万暦三十年(1602)に編纂した『仙仏奇踪』のことで、道教の仙人と仏教の祖師の伝記とその図像(124名)が収載されている。素庵所持本は、我が国に舶載された最初の本であろう。江戸時代以降、それは翻刻されなかった。宗達は工房の弟子とともに『仙仏奇踪』を絵手本として仙仏画を扇面画や押絵貼屏風に描いた。当時[注4]、他にそれを絵手本として描いた絵師はいない。「六原の絵かき」は宗達のことである、と推定される。

【嵯峨本について】

嵯峨本とは、慶長年間(1596~1614)に洛西嵯峨において角倉素庵が自ら企画し出版した本をいう。漢字・平仮名交りの木活字版(古活字版ともいう)と、文字や挿絵が彫刻された版木で摺刷する整版を用い、多くは具引き(白い胡粉を刷く)や色替り(色具引きを刷く)料紙に印刷された美しい装訂の国書のことである。『徒然草』『伊勢物語』『源氏物語』『観世流謡本』など十数書目が刊行された。木版雲母刷文様表紙や装飾された本文料紙は、宗達が経営する絵屋「俵屋」(六原)で制作され、嵯峨の印刷・製本工房に送られた。木活字には単字(全格活字)のほか二字(二倍格)、三字(三倍格)、四字(四倍格)の連彫活字[注5]が多く用いられた。嵯峨本活字書体(徒然草フォント・伊勢物語フォント・謡本フォント・源氏物語フォントなど)は、素庵自身がデザインしたものである。テキストの選択、校訂も素庵が行った。

嵯峨本『伊勢物語』(慶長十三年初刊本)





- 1 | 当時不治の病とされ、また宗教的理由より、現在からは想像を超えた社会的差別の極にあるものだった。この病に罹患したものは家を出て非人宿に入るか、乞食となり放浪するしかなかった。
- 2 | 「露峰」は起筆（第1画目への入筆）において筆先の鋭さを画の外側に見せる書き方。「蔵峰」とは起筆において画の内側に筆先の痕跡を隠してしまう書き方で、画の進行方向とは逆に入筆する。素庵と光悦それぞれの特徴としているが、割合の多寡の問題である。
- 3 | 前出「ハンセン病」のこと。
- 4 | 慶長・元和・寛永期を指す。
- 5 | 連綿活字、連鑄活字ともいう。草書体やその派生である平仮名書きにおいて何文字か続け書きをしますが、それを活字に起こすとき、何文字分かを一文字分の長さの何倍かにした活字。